

fig.220  
第2遺構面平面図

溝状遺構である。多量の遺物が出土した。完形品となる壺・甕・高坏が約40個体、石庖丁、石庖丁形木製品・板・杭、種子などである。時期は弥生時代後期に属する。

SD 208 I区中央～南にかけて検出された溝状遺構である。幅0.3m、深さ0.2mの規模で、SD 207に並行する。

SD 207とSD 208は、II区北で検出された竪穴住居の位置などから、集落を画する環壕のような性格が考えられる溝状遺構である。

SD 209 II区中央SD 201に切られる溝状遺構である。幅0.4m、深さ0.2mの規模で、微量の土師器が出土した。

SD 210 II区北SD 205を切る溝状遺構である。当初東西約4m、南北0.5mの細長い範囲で、土器がまとまって検出された（土器群B）。遺物を取り上げると東西3.2m、幅0.4m、深さ0.3mの溝状遺構となった。遺物は、壺・甕・高坏と石斧片である。

SD 211 I区中央SD 208に切られる幅0.6～1.6m、深さ0.1mの浅い溝状遺構である。少量の弥生土器が出土した。

- SD 212 I区南で検出された溝状遺構である。幅0.2m、深さ0.2mの規模で、少量の弥生土器が出土した。
- SK 201 II区北で検出された長径0.9m、短径0.8m、深さ0.2mの土坑である。少量の弥生土器が出土した。
- SK 202 II区南SD 201に切られる長径0.8m、短径0.7m、深さ0.1mの土坑である。少量の土師器が出土した。
- SK 203 II区中央SD 201に切られる東西0.9m、南北0.8m、深さ0.05mのやや不整形の土坑である。少量の土師器が出土した。
- SX 201 II区南で検出された東へ下がる、不整形の堆積である。規模は東西約7m、南北約8m、深さ0.05mで、土師器、弥生土器が出土した。
- SX 202 II区南で検出された不整形の落ち込み状遺構である。規模は東西2.5m、南北2.0m、深さ0.05mで、土師器、弥生土器が出土した。
- SX 203 SX 201の下層で検出された不整形の落ち込み状遺構である。東西約6m、南北約4m、深さ0.1mの規模で、南西隅で甕がまとまって出土した（土器群C）。その他土師器、弥生土器が出土した。
- SX 204 SX 201の東端で検出された楕円形の落ち込み状遺構である。長径1.6m、短径0.9m、深さ0.05mの規模で、弥生土器が出土した。
- SX 205 II区南で検出された卵形の落ち込み状遺構である。長径3.2m、短径2.6m、深さ0.05mで、弥生土器が出土した。
- SX 206 II区南で検出された瓢箪形の落ち込み状遺構である。長径0.6m、短径0.4m、深さ0.1mで、微量の弥生土器が出土した。
- SX 207 II区北で検出された竪穴住居である。東端はSD 101、上面はSX 107、その他第1遺構面の柱穴などで切られている。  
南辺には周壁溝が一部残存するが、他は竪穴住居の痕跡のみであった。復元すると一辺約4.5mの方形の竪穴住居と考えられる。中央土坑をもち、柱穴が2か所4基検出された。柱穴はそれぞれ切り合いがあり、建て替えがあったと考えられる（柱間距離3.2m）。中央土坑周辺及び上面から壺がほぼ1個体分破片で出土した。土坑内には炭層が観察され、この炭層は土坑周辺から床面にひろがっている。断面観察から中央土坑には周堤が存在したことが判明した。床面には、中央土坑と同様炭層がひろがっている。
- SX 208 I区中央東西1.1m、南北0.4m、深さ0.05mの不整形の遺構である。少量の弥生土器が出土した。
- SX 209 II区中央西壁に検出された南北1.4m、深さ0.4mの落ち込み状遺構である。微量の土師器が出土した。
- 土器群 A I区南G-3区で、第2遺構面包含層掘削過程で検出された、平面形が0.5m角の土器群である。壺・甕・高坏・器台が出土した。完形品を据えたという様な状況ではなく、この下層にも遺構は伴わなかった。
- SB 201 桁行4間（柱間1.4m）、梁行2間（柱間1.65m）の掘立柱建物である。東側のみ棟持柱を確認した。

柱 穴 散在する状況で建物などにまとまるものはなかった。

第2遺構面は、基本的には弥生時代後期～古墳時代前期の遺構面であるが、Ⅱ区中央～南の遺構でSD 202のように、中世の須恵器片、土師器片の入る遺構がある。層序からは、第2遺構面の包含層を約0.2～0.3m掘削した後に検出された遺構面である。敢えて述べれば、第1遺構面と第2遺構面との間の時期の遺構として捉える必要がある。今後に時期の詳細な検討を期す。

第3遺構面 I区中央～Ⅱ区南にかけて、弧状に走る川状遺構である。幅約8m、深さ0.5mで、東

SD 301 西肩でそれぞれ幅1.1m、深さ0.2m (SD 302)、幅0.9m、深さ0.3m (SD 303)に分岐する溝状遺構がある。SD 301の南部川底から、SX 302～306のあわせて5基の不整形の土坑状の遺構が検出された。SD 301からの出土遺物は少量であった。弥生時代中期頃のものと考えられる。

SD 304 I区南で検出された幅0.2m、深さ0.05mの浅い溝状遺構である。

SX 301 I区南SD 301を切る南北5.6m、深さ0.7mの落ち込み状遺構である。弥生時代後期の壺・甕が出土した。

	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	備 考
SX 302	1.6	1.1	0.6	杭無・不整形
SX 303	1.8	1.3	0.5	杭有・不整形
SX 304	4.0	3.6	0.5	杭有・不整形、南側一段浅い
SX 305	2.5	1.2	0.1	杭有・不整形
SX 306	1.2	0.8	0.2	杭無・不整形

第4遺構面 第1遺構面で述べた段丘崖裾を西北から東南にかけて流  
河 道 れる河道である。最上層から弥生前期の甕片が少量出土した。規模は不明である。

SX 102 堆積土は上下2層に分けられる(暗褐色砂泥・暗黒褐色砂泥)。この2層を掘削して検出された遺構については、400番代の遺構番号を付す。サヌカイト片とともに出土する土器は著しく残存状態が悪い。この中で辛うじて時期の判明する土器として、縄文時代晩期滋賀里Ⅲに属する浅鉢口縁部がある。

SD 401 幅0.4m、深さ0.1mの溝状遺構で、SX 401とつながる。

SX 401 東西2.6m、南北3.2m、深さ0.3mの落ち込み状遺構で、両遺構より微量の土器とサヌカイト片が出土した。

SX 402 東西1.6m、南北0.9m、深さ0.6mの落ち込み状遺構で、微量の土器・サヌカイト片・石鏃と叩石1点が出土した。

### 3. まとめ

中世から順次述べると、15棟以上の規則性のある掘立柱建物と硯の出土から、当時の荘官クラスの建物の一部と考えられる。建物群の占地は背後に丘陵を、前面に水田のひろが

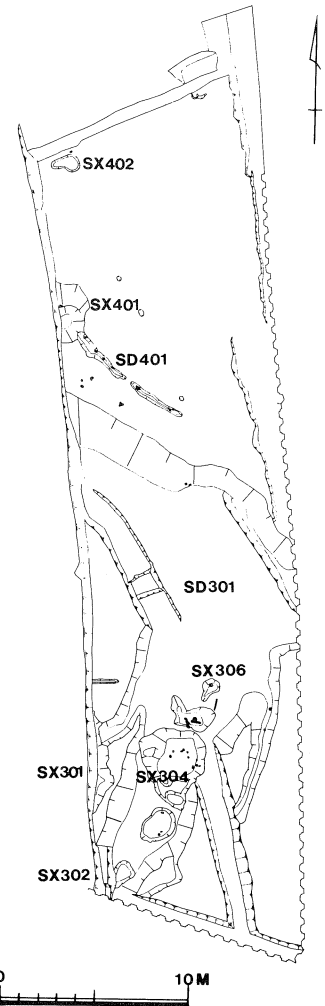


fig.221 第3・4遺構面平面図

りをもち、高燥の地に荘館を構えるには、絶好の条件といえる。また漆の付着した須恵器や鉾津などが出土したことは、荘園管理のなかに組み込まれた工房・工人の存在を窺わせるものである。

弥生時代には、環壕を思わせる溝（SD 207）と溝内の遺物量の多さ、竪穴住居（SX 207）の検出から、SD 207の西側に集落の存在が考えられる。当調査地から東へ約100mの段丘上には、弥生～古墳時代にかけての竪穴住居が5棟検出されている（1次調査・平成元年度）。

沖積地上の集落と段丘上の集落が、約100m離れて存在することが判明した。このことから、この付近で営まれた当時の生活空間のひろがりを知る手掛かりが得られた。

縄文時代では、これまでの1～7次の調査では土器の出土はあったが、明確な遺構は伴わなかった。また、多量のサヌカイト片の出土の意義については今後の整理によって明らかにしたい。

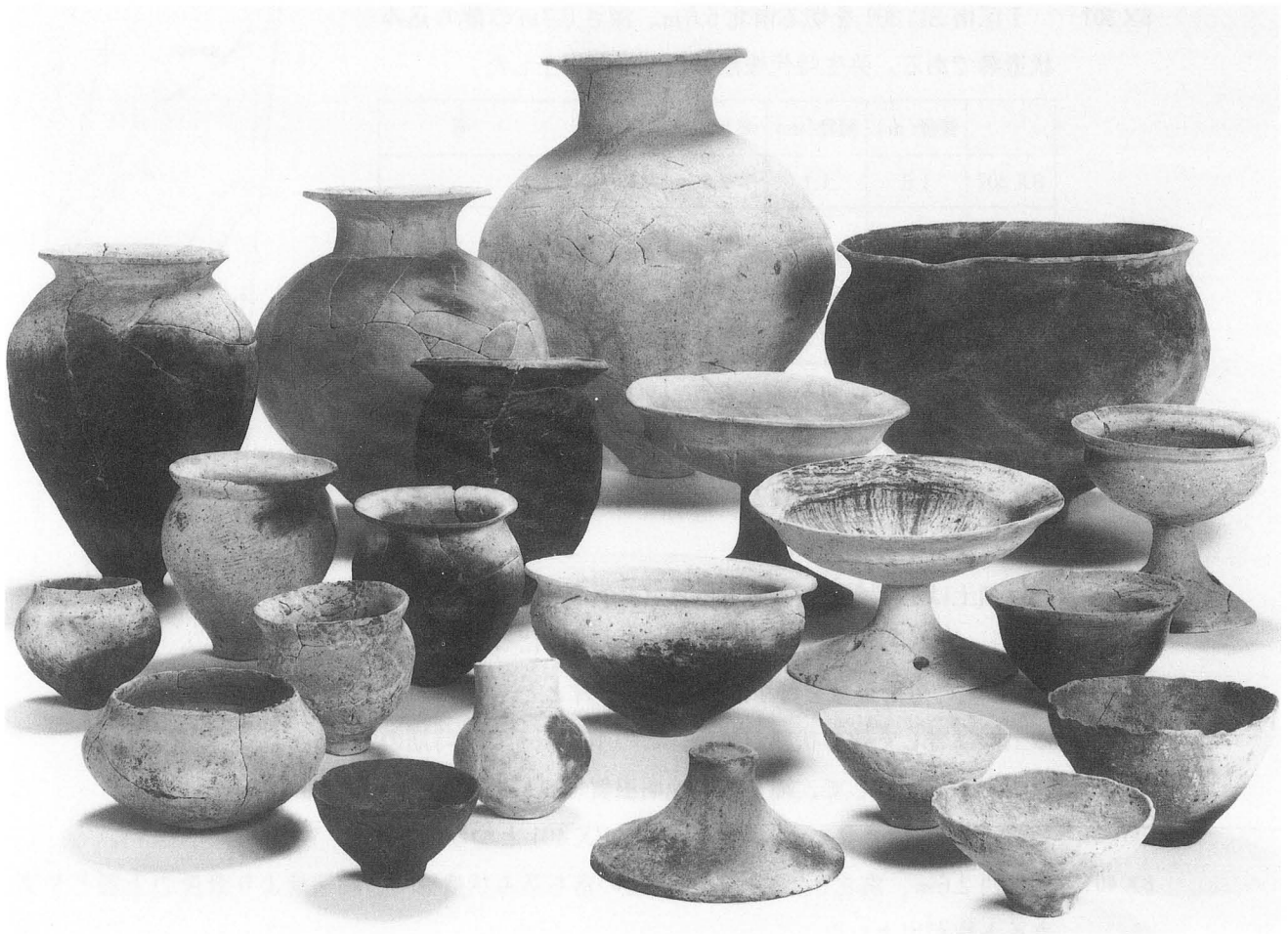


fig.222 SD 205 出土土器

## 29. <sup>おおたに</sup>大谷遺跡

### 1. はじめに

調査地は神戸市農政局が計画した牧場造成工事に先立ち、平成5年4月～5月に行った試掘調査によって発見された遺跡である。34か所の試掘溝を設定して調査したところ、21か所の試掘溝において、弥生土器、石器などの遺物の出土や焼土の拡がりが見出された。

上記の試掘調査の結果に基づき遺跡の現地保存について協議し、保存不可能な範囲について全面発掘調査を行うことになった。

周辺の遺跡は西側の明石川左岸の丘陵上に西神ニュータウン内遺跡、南側では印路遺跡や印路古墳群等が近接している。

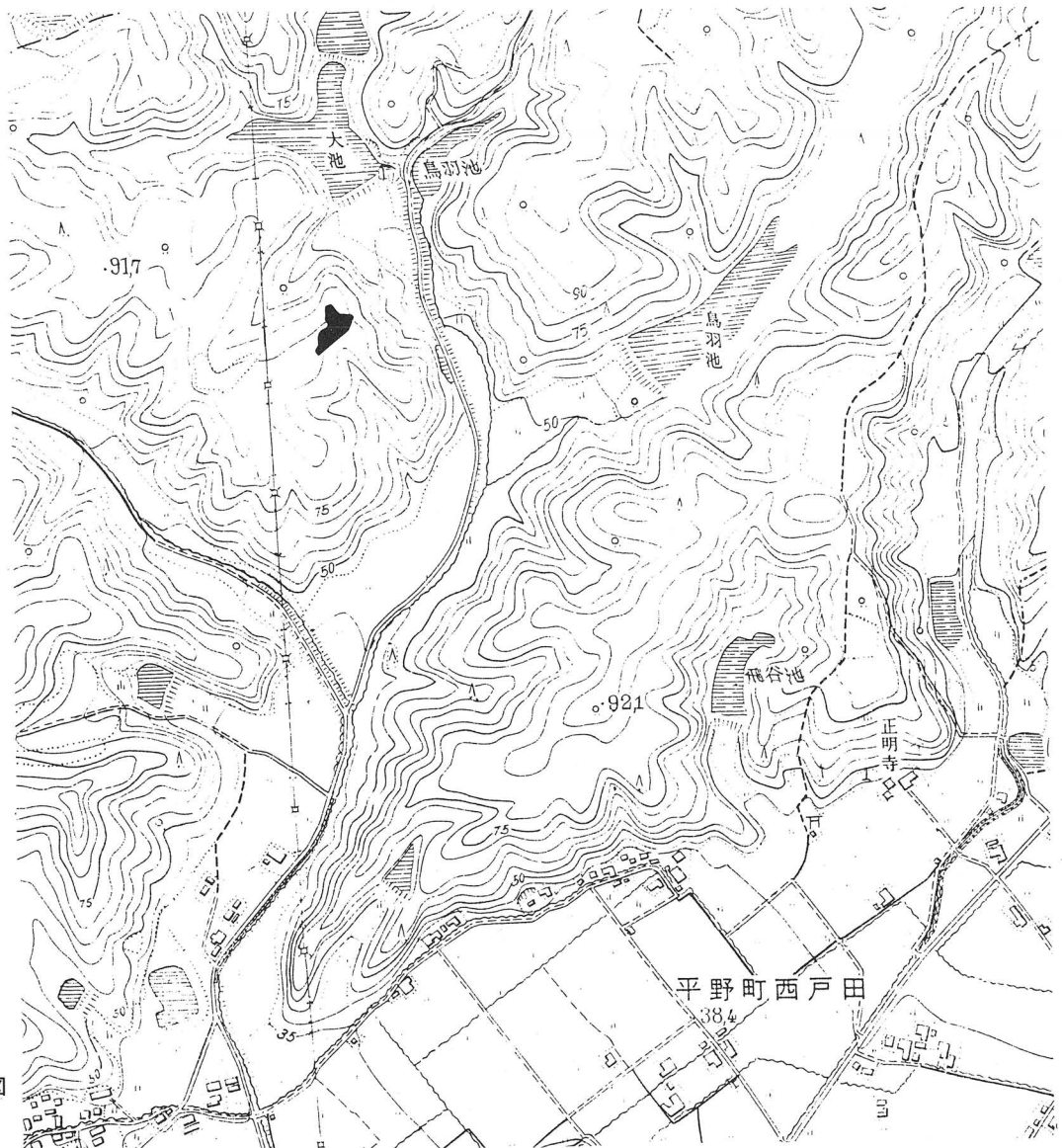


fig.223  
調査地点位置図  
1 : 10000

### 2. 調査の概要

調査区は尾根上平坦部と東側斜面が残るのみで、西側斜面は既に崩壊している。調査は樹木の伐採から行い、掘削は人力によって行った。

遺構面を精査した結果、竪穴住居1棟、土坑10基、ピット等を検出した。これらの遺構は弥生時代中期後半のものと考えられる。



fig.224  
調査地点位置図  
1 : 2500

- SB 01 調査範囲の中央付近の尾根上で検出した竪穴住居 (SB 01) は、その半分が西側斜面の崩壊により流失し、東半分しか残存していない。竪穴住居は直径 4.5m で、円形をしていたと推測される。残存している深さは 18cm である。住居の半分が崩壊しているため検出された柱穴は 2 基だが、4 本柱で構成された住居であったと推定される。周壁溝は無く、住居の床面中央で直径 1.1m、深さ 28cm の土坑を検出した。土坑埋土は極細砂で、炭化物がわずかに混入する。炉として利用されたものであろう。床面の南側周壁際で炭化材が少量出土している。出土土器から弥生時代第 IV 様式期の住居であると思われる。
- SX 01 調査範囲の南端付近で不定形な落ち込みを検出した。遺構の北側と西側が崩壊しているため、全体の形状は不明である。残存している最大長は 4.3m で、緩やかに落ち込み、平坦面を造り、さらに緩く落ち込んでいる。埋土からは炭化物や焼土が出土しており、磨製石斧の破片が出土している。出土土器から弥生時代第 IV 様式期のものであると思われる。
- SK 01 長径 1.4m、短径 94cm の楕円形で深さは 17.5cm の土坑である。焼土と炭化物を含む。
- SK 02 直径 70cm の円形で、深さ 28cm の土坑である。
- SK 03 焼土を多く含む不定形な土坑で、最大長 1.7m、深さ 34cm の土坑である。
- SK 04 炭化物を多く含む土坑である。直径 90cm の円形で、深さは 14cm である。
- SK 05 長径 1.7m、短径 1.1m の楕円形で、深さ 32.7cm の土坑である。埋土には多くの焼土塊を含み、炭化物も含んでいる。
- SK 06 長径 1.2m、短径 88cm の楕円形で、深さ 42cm の土坑である。炭化物をわずかに含む。

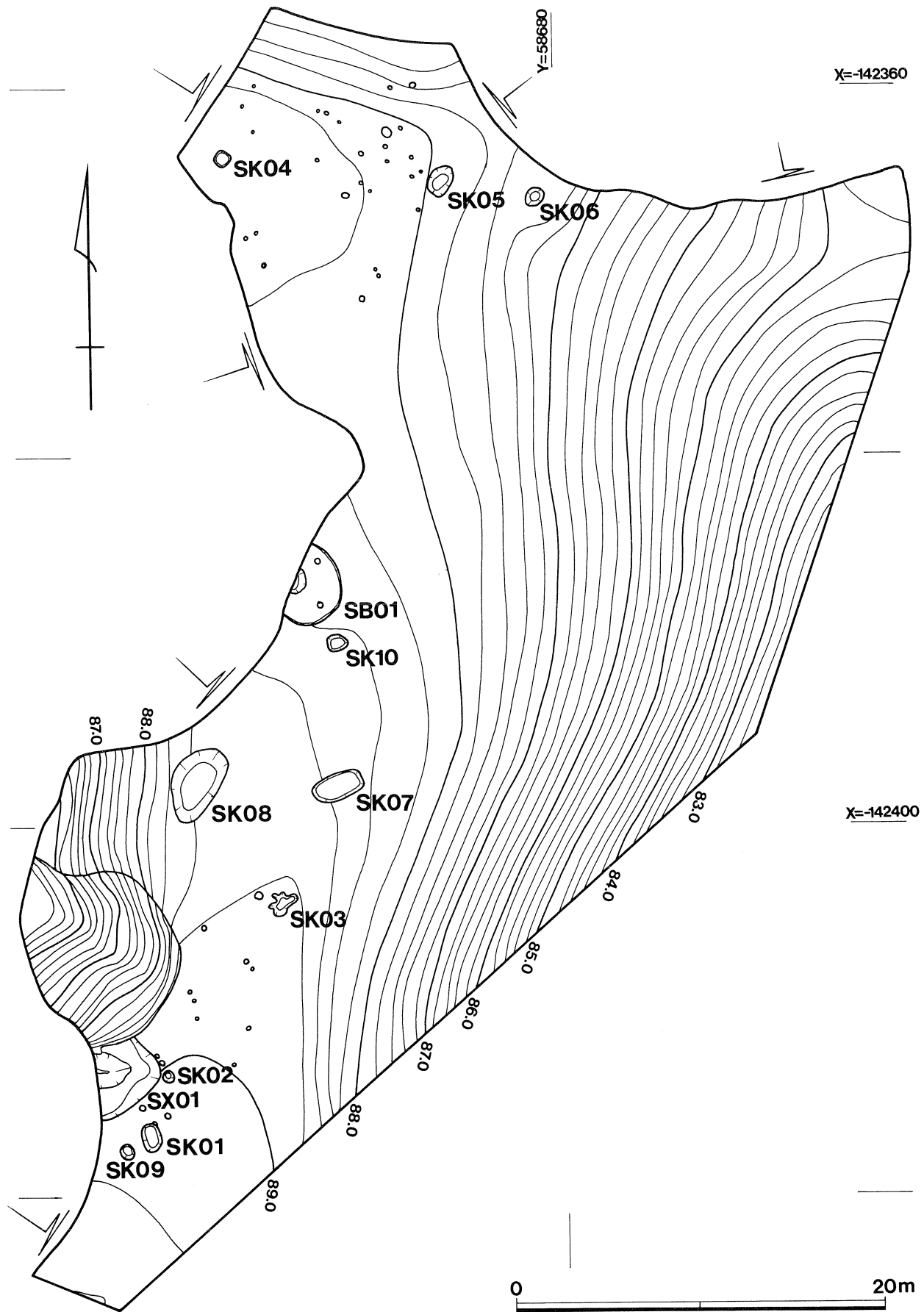


fig.225 調査地区全体図

- SK 07 長径 2.9m、短径 1.4mの楕円形で、深さ31cmの土坑である。
- SK 08 長径 4.4m、短径 2.2mの楕円形で、深さ14cmの土坑である。斜面で検出された浅い土坑で、底面も斜面の低い方に傾斜しており、自然の落ち込みの可能性がある。
- SK 09 直径76cmの円形で、深さ24cmの土坑である。炭化物をわずか含む。
- SK 10 長径 1.1m、短径72cmの楕円形で、深さは27cmの土坑である。炭化物をわずか含む。

これらの土坑はSK 05のみが弥生時代Ⅳ様式と思われる土器を出土しただけで、その他の土坑からは遺物が出土せず、時期の特定は出来ない。

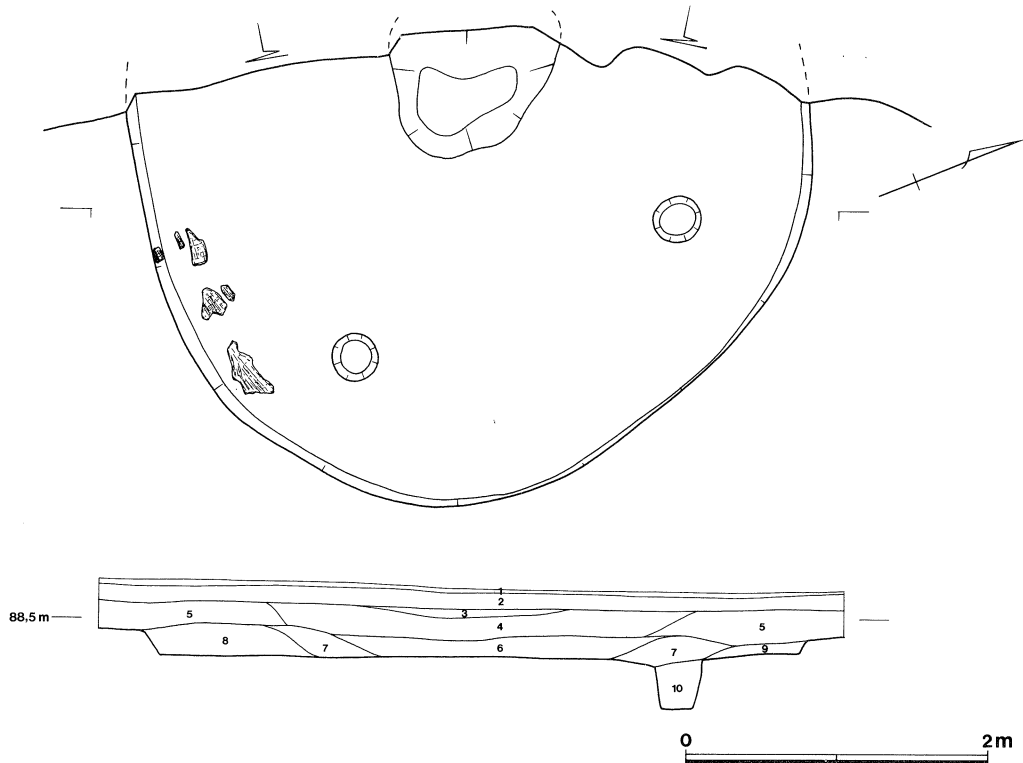


fig.226 SB 01 平・断面図

### 3. まとめ

今回の調査では、弥生時代中期後半の竪穴住居を含む集落が発見され、これまで周辺の印路の丘陵では見つけていなかった当該期の高地性集落遺跡が見つかったことは特筆すべきことである。同時期の高地性集落は明石川を挟んで対面する西神ニュータウン内第50地点遺跡や、当遺跡と同じ明石川の西側丘陵に位置する鍋谷池遺跡が近接しているが、高地性集落間の関係を考える上で今回の調査は貴重な発見となった。

出土遺物は弥生時代中期の土器がほとんどであるが、その中に生駒西麓産の壺が1点含まれている。また、弥生時代前期の土器片が2点出土しており、中世の須恵器も1点出土している。この時期の遺構は検出されなかったが、その存在を示唆するものである。その他石鏃5点、石錐1点が出土している。

竪穴住居は1基のみを検出したただけであったが、調査地点の周辺平坦面には竪穴住居を含む遺構の存在が試掘調査から明らかであり、大規模な集落を形成していたと思われる。

当遺跡の存在する丘陵からの眺望は良く、南側は印路、平野の沖積地が一望の下で、明石海峡まで見渡せる位置にある。このことも、集落を造営した一因であろう。



### Ⅲ. 平成5年度の大規模試掘調査

#### 概 要

神戸市では、各種開発・造成工事に伴い、埋蔵文化財の存否を確認する試掘調査を実施している。主として、住宅建設等に伴う小規模な試掘調査は、今年度は211件であった。それ以外に、大規模な地形改変を伴うものとして、土地区画整理事業および土地改良事業（圃場整備）などがあり、毎年広範な地域で試掘調査を実施している。これらの試掘調査によって、新たに発見される遺跡があるのはもちろんであるが、周知の遺跡でも、その範囲内での遺構の状況等が明確になり、遺跡のより詳細な内容が把握できるようになってきている。

平成5年度に実施した大規模土地改変に伴う試掘調査は、土地区画整理事業に伴うものとして北区道場八多特定土地区画整理事業、西区野手西方地区土地区画整理事業、上池土地区画整理事業がある。道場八多特定土地区画整理事業に伴う試掘調査は、原因者の意向に合わせ平成元・2・5・7年度に実施したものである。土地改良事業に伴うものとして北区八多地区、淡河地区、西区松本地区の各土地改良事業がある。この他に、明石川流域の弥生時代中期の高地性集落として既に著名な頭高山遺跡を、神戸市研究学園都市の造成範囲拡大に伴って試掘調査を実施した。弥生時代の遺構・遺物のみでなく、寺院址と考えられる遺構も確認された。現在伊川谷町小寺に所在する太谷寺の前身で、「太山寺文書」に見える「太谷寺」ではないかと推定されている。

試掘調査は、基本的に平面2mの方形で設定し、バック・ホーまたは人力により遺物包含層上面ないしは遺構面直上まで掘削し、その後、平・断面の精査を行っている。また、必要に応じてトレンチ調査で確認している場合もある。

#### 大規模試掘調査一覧

事業名	遺跡名	試掘坑数	試掘面積	試掘調査結果
道場八多地区特定土地区画整理事業	日下部八多中	158	632 m <sup>2</sup>	古墳時代包含層・遺構 中世遺物包含層・遺構
八多地区土地改良事業	吉尾附物	189	756	中世遺物包含層・遺構
淡河地区土地改良事業（僧尾地区）	南僧尾	324	1,296	中世遺物包含層・柱穴・溝
神戸市研究学園都市建設	頭高山	1,316	トレンチ	弥生中期遺構・遺物 古墳 中世寺院址
松本地区土地改良事業	松本	20	80	弥生・中世遺物包含層・遺構
神戸ビーフ育成牧場建設	大谷	1,070	トレンチ	弥生中期遺構
野手西方地区土地区画整理事業	新方	13	54	弥生・古墳・中世遺物包含層
上池地区土地区画整理事業	新方	19	78	中世遺物包含層・遺構





凡 例  試掘調査対象範囲  試掘調査地点  遺跡存在範囲  現状保存範囲



fig. 227 北区試掘地域全体図

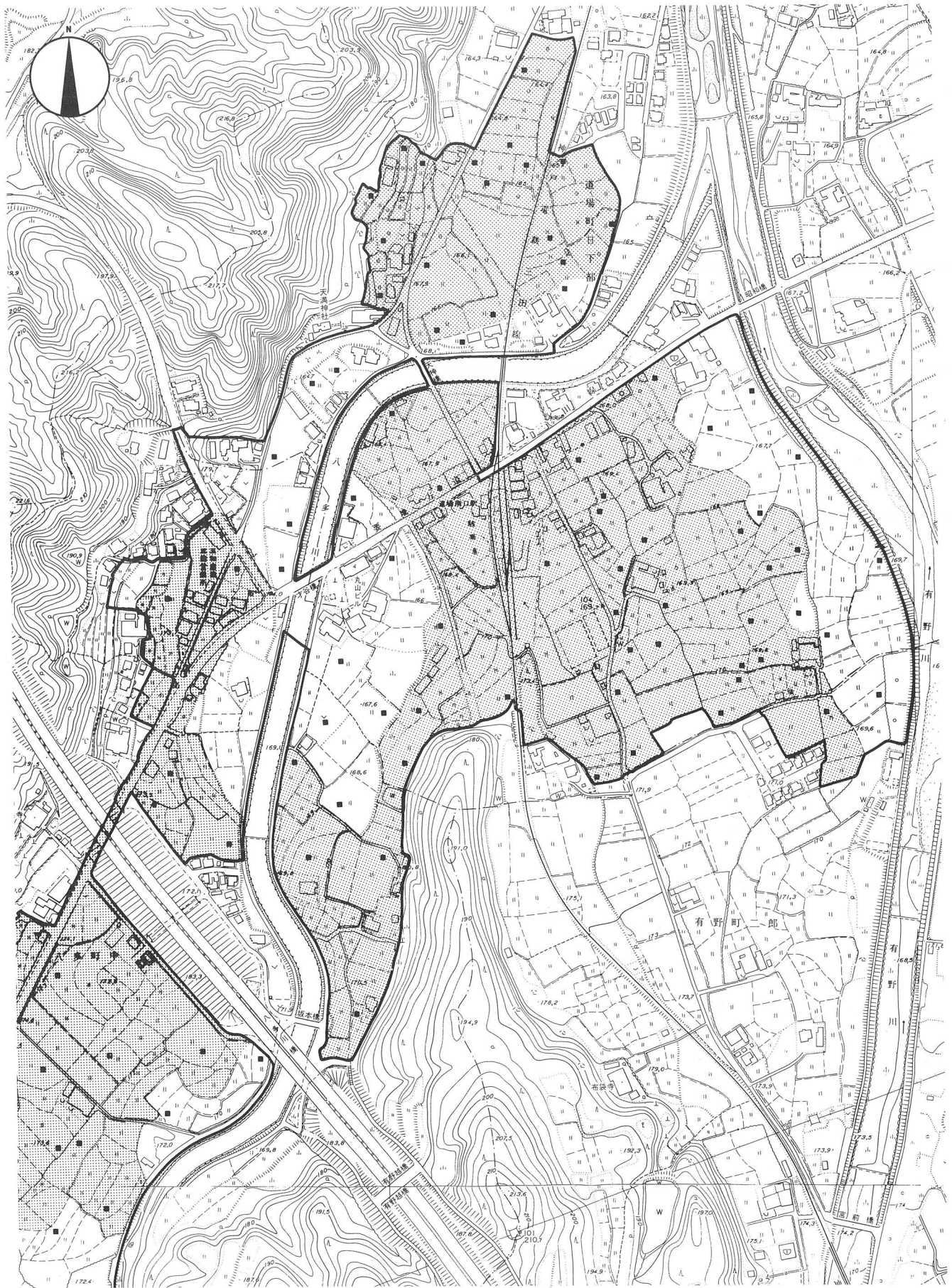


fig.228 道場八多地区試掘調査地点 (S = 1/5000)

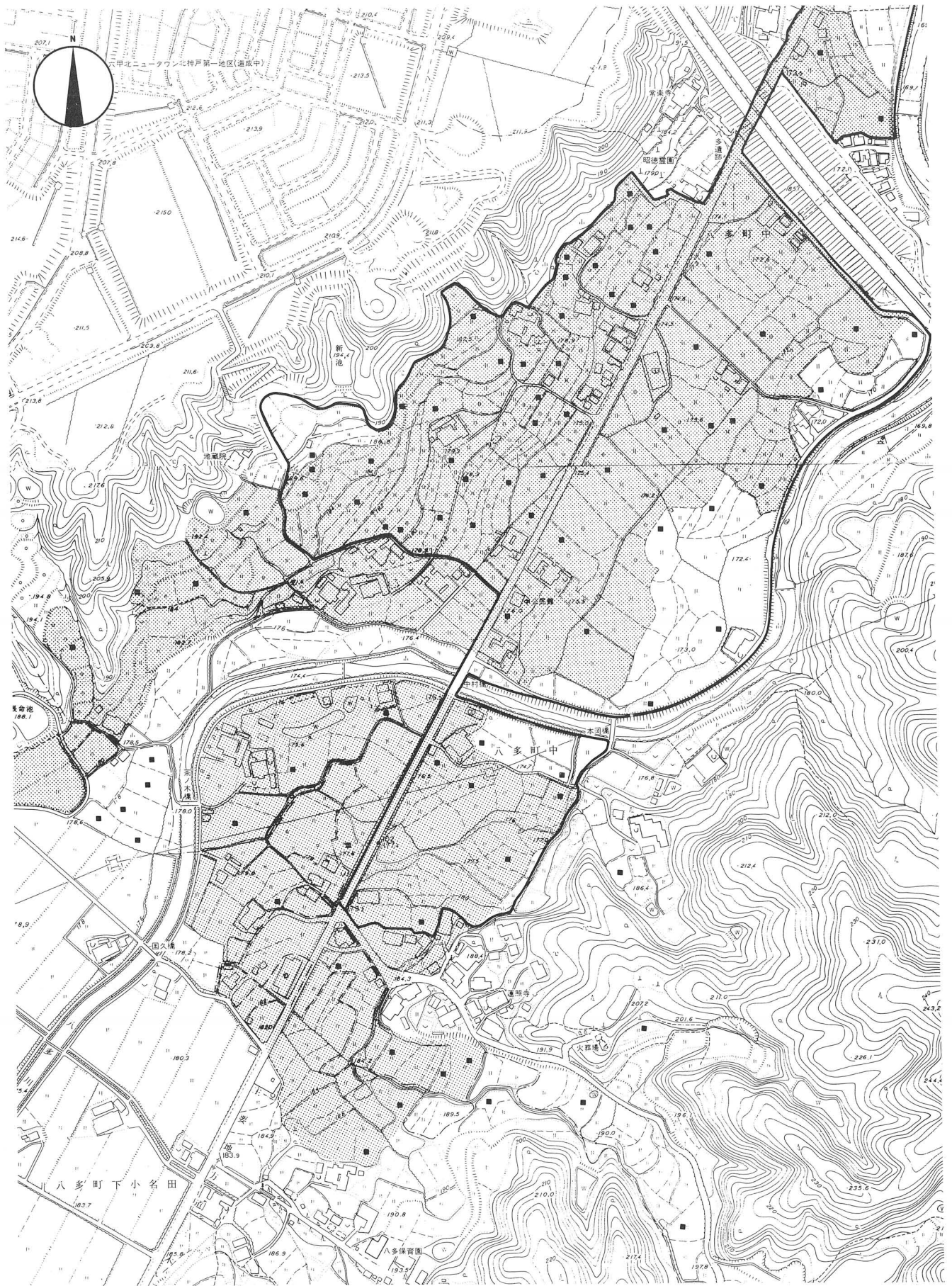


fig.229 道場八多地区試掘調査地点 (S = 1 / 5000)



fig. 230 八多地区試掘調査地点 (S = 1/5000)



fig.231 淡河地区試掘調査地点 (S = 1 / 5000)



fig.232 淡河地区試掘調査地点 (S=1/5000)



fig.233 西区試掘地域全体図



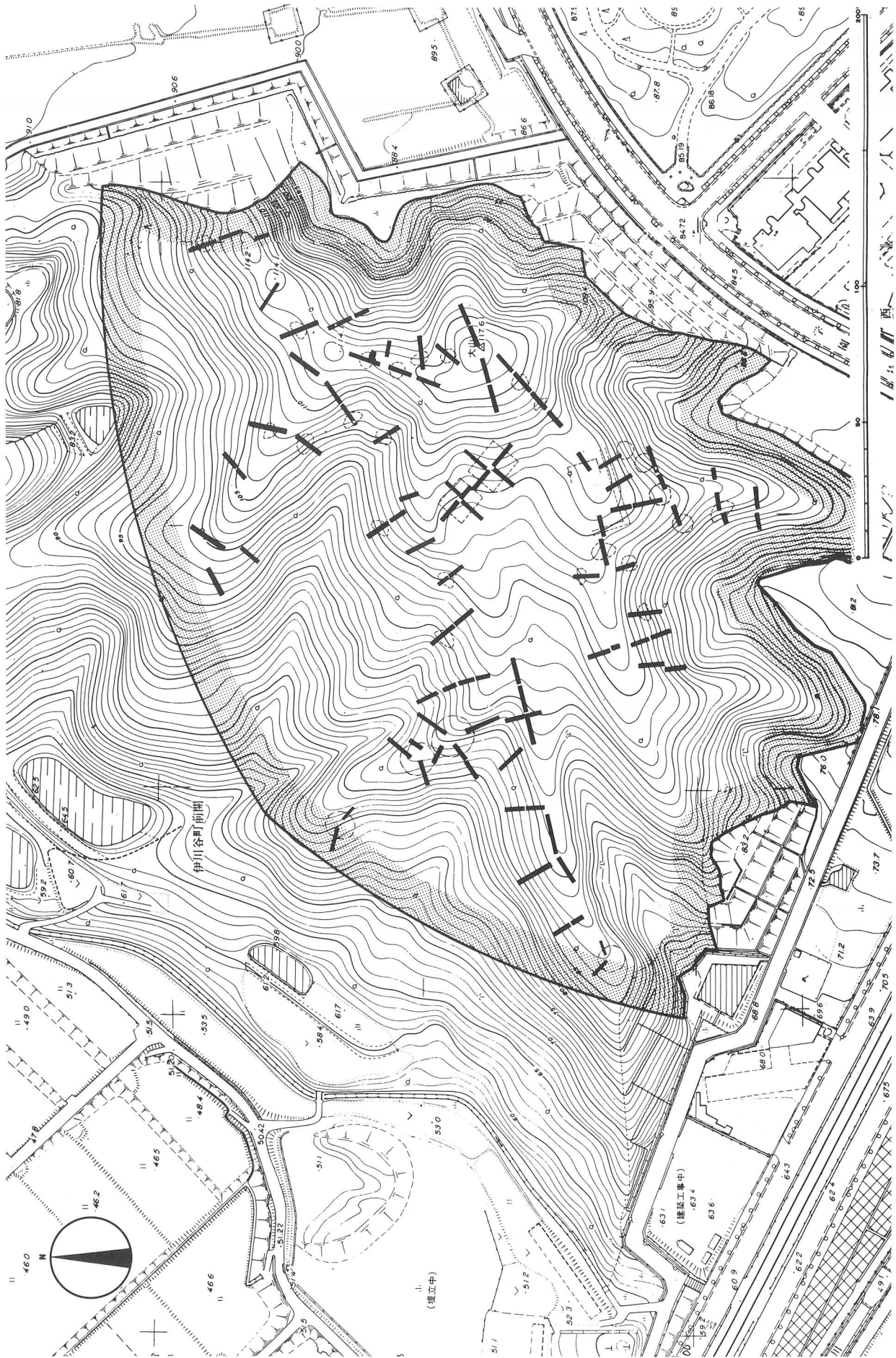


fig.234 頭高山遺跡試掘調査地点 (S = 1/5000)

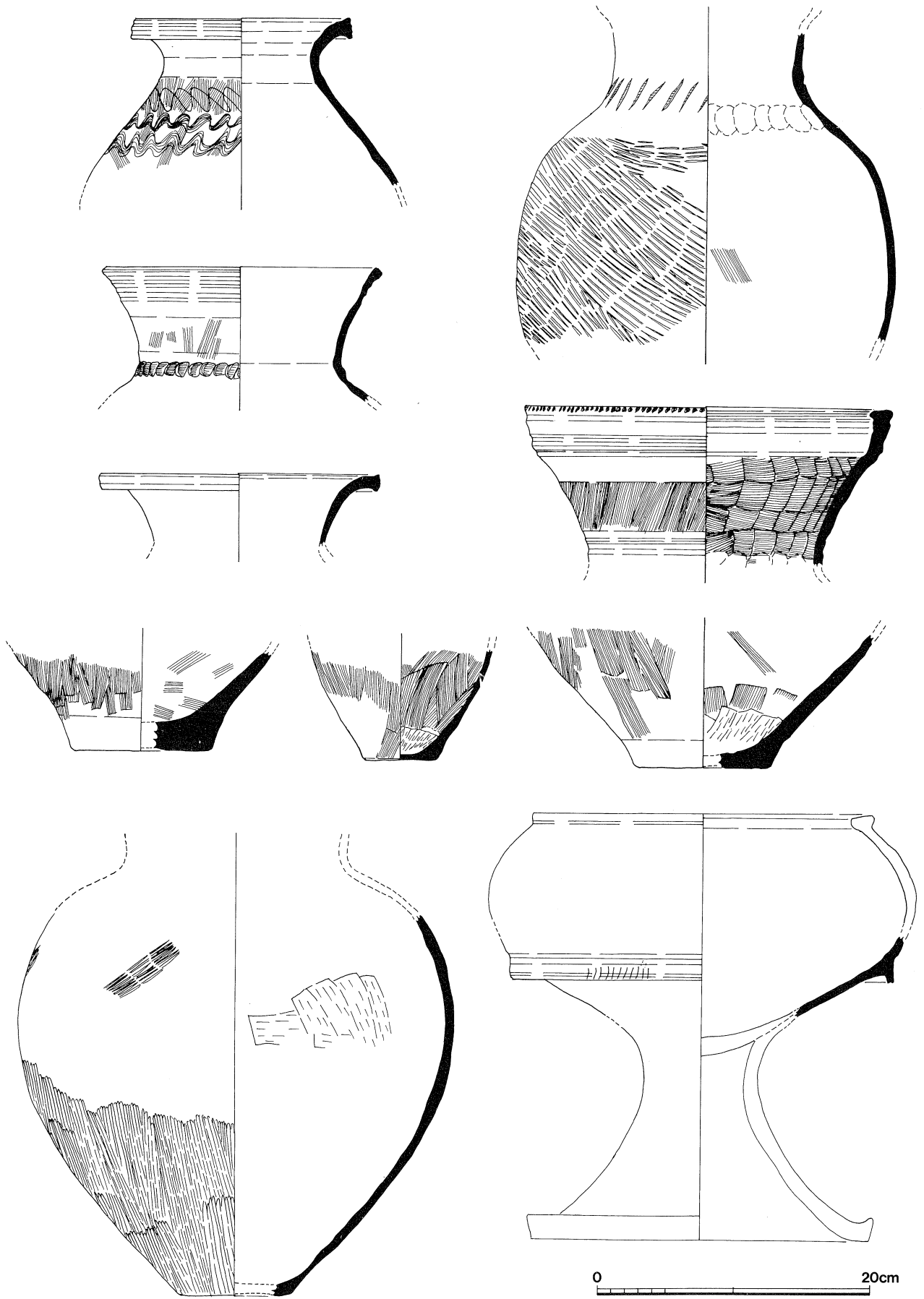


fig. 235 頭高山遺跡出土弥生土器実測図

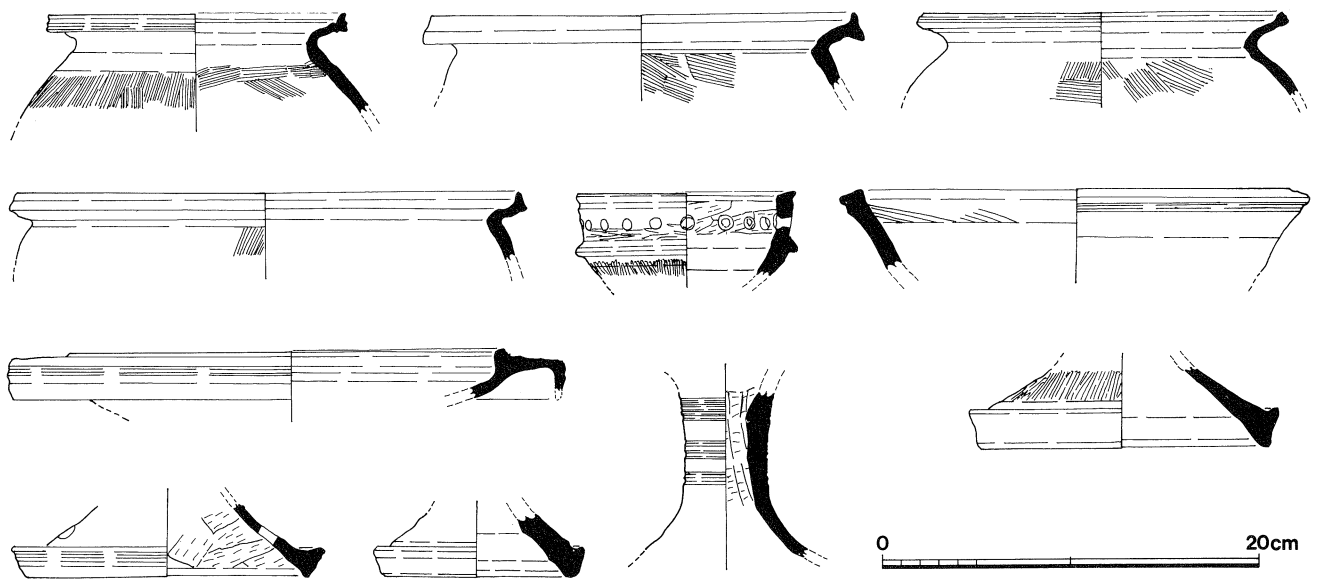


fig.236 頭高山遺跡出土弥生土器実測図

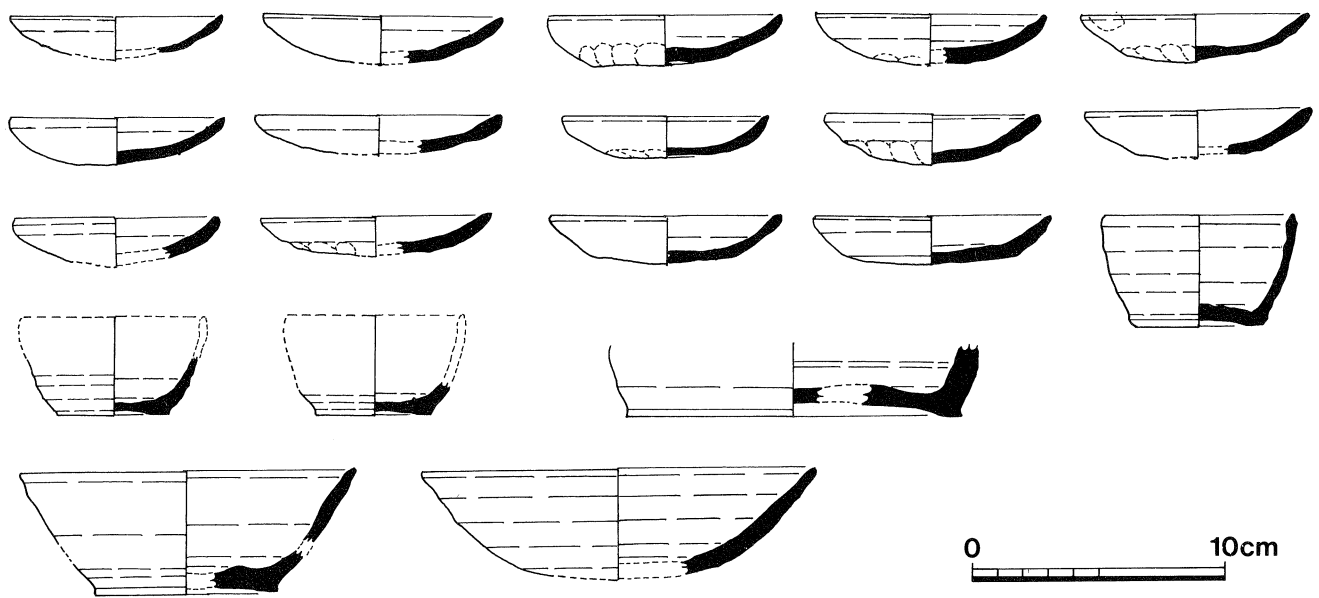


fig.237 頭高山遺跡出土土師器・須恵器実測図



fig.238 松本地区試掘調査地点 (S=1/5000)

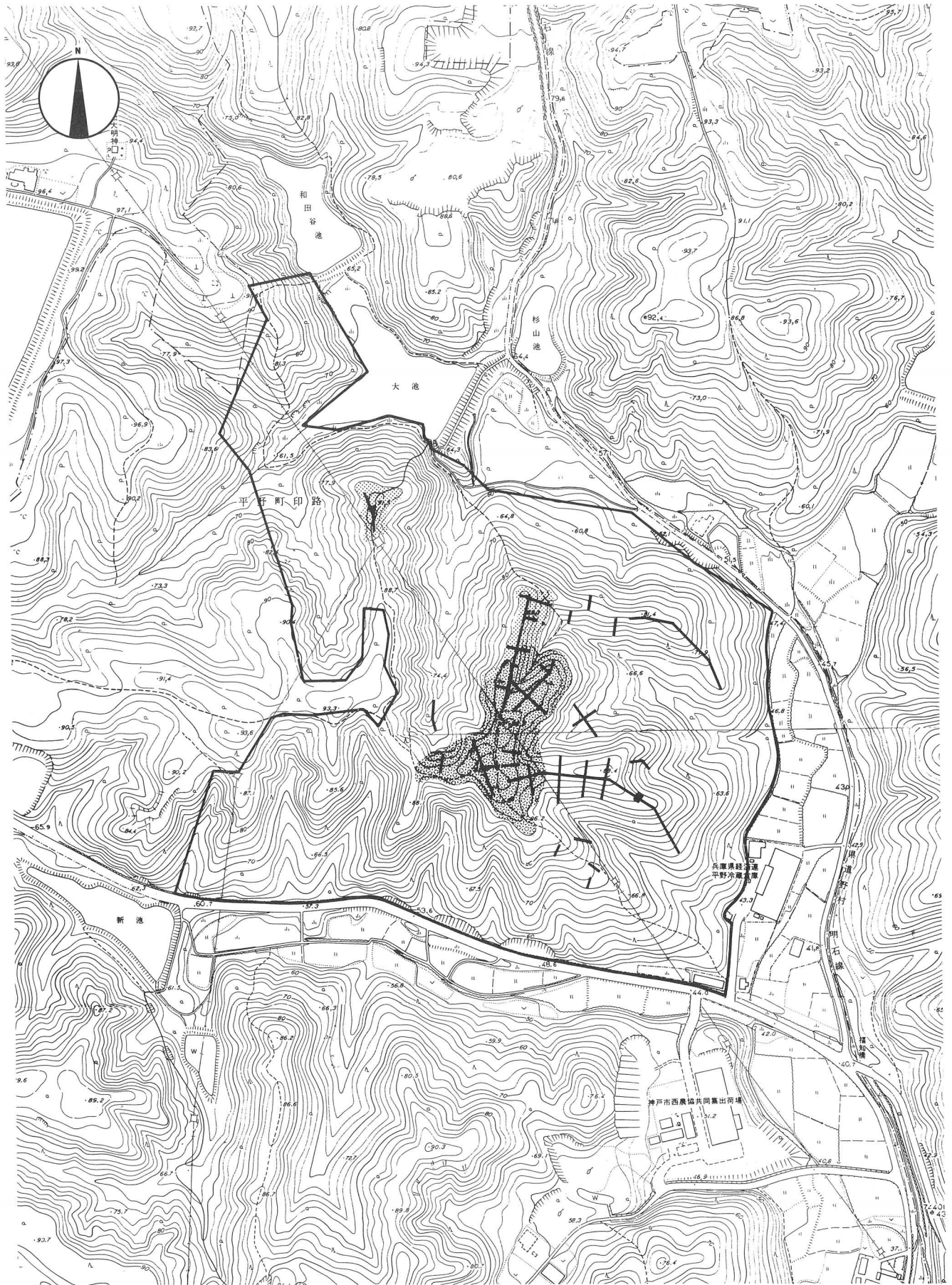


fig.239 大谷遺跡試掘調査地点 (S = 1/5000)

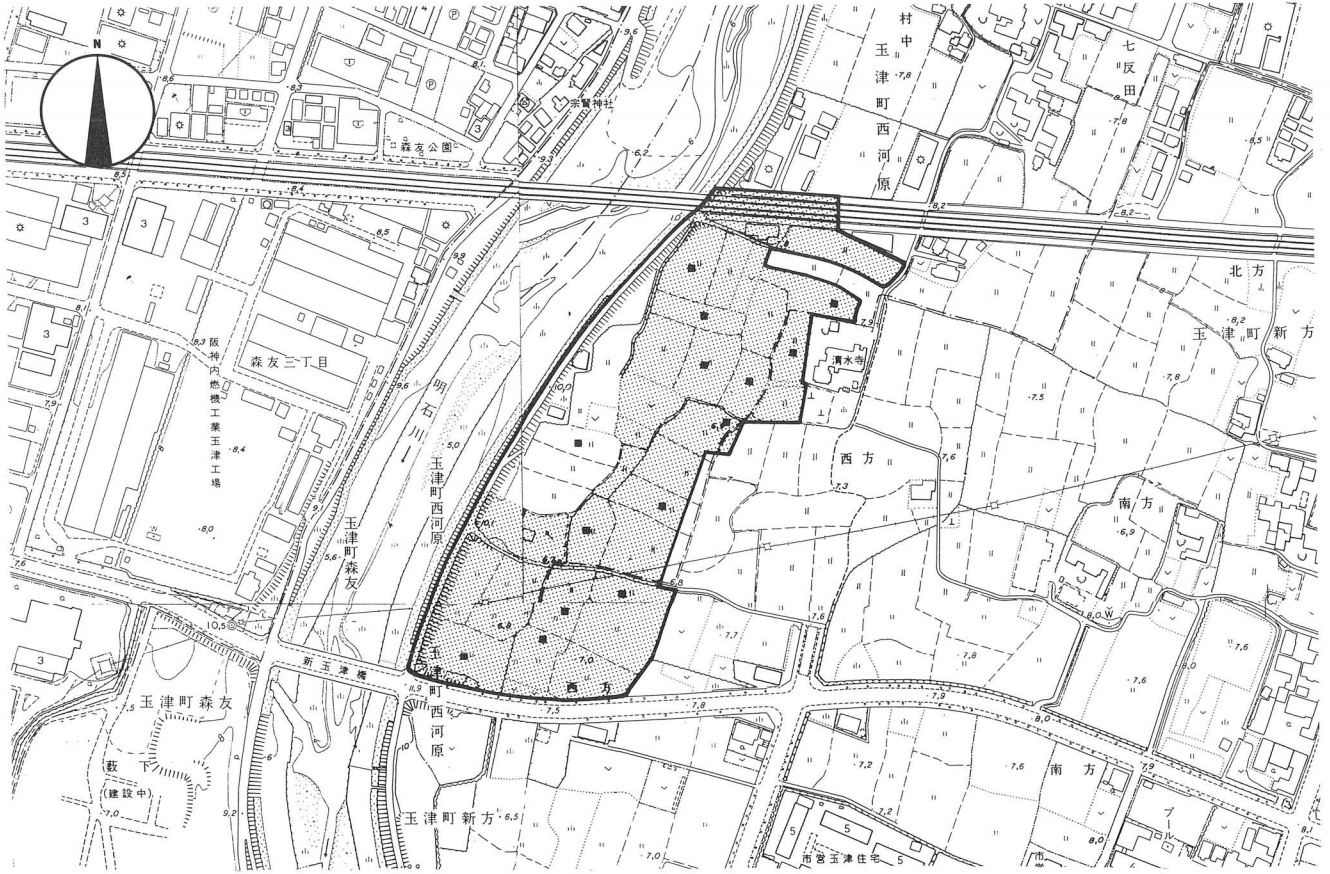


fig.240 野手西方地区試掘調査地点 (S = 1/5000)

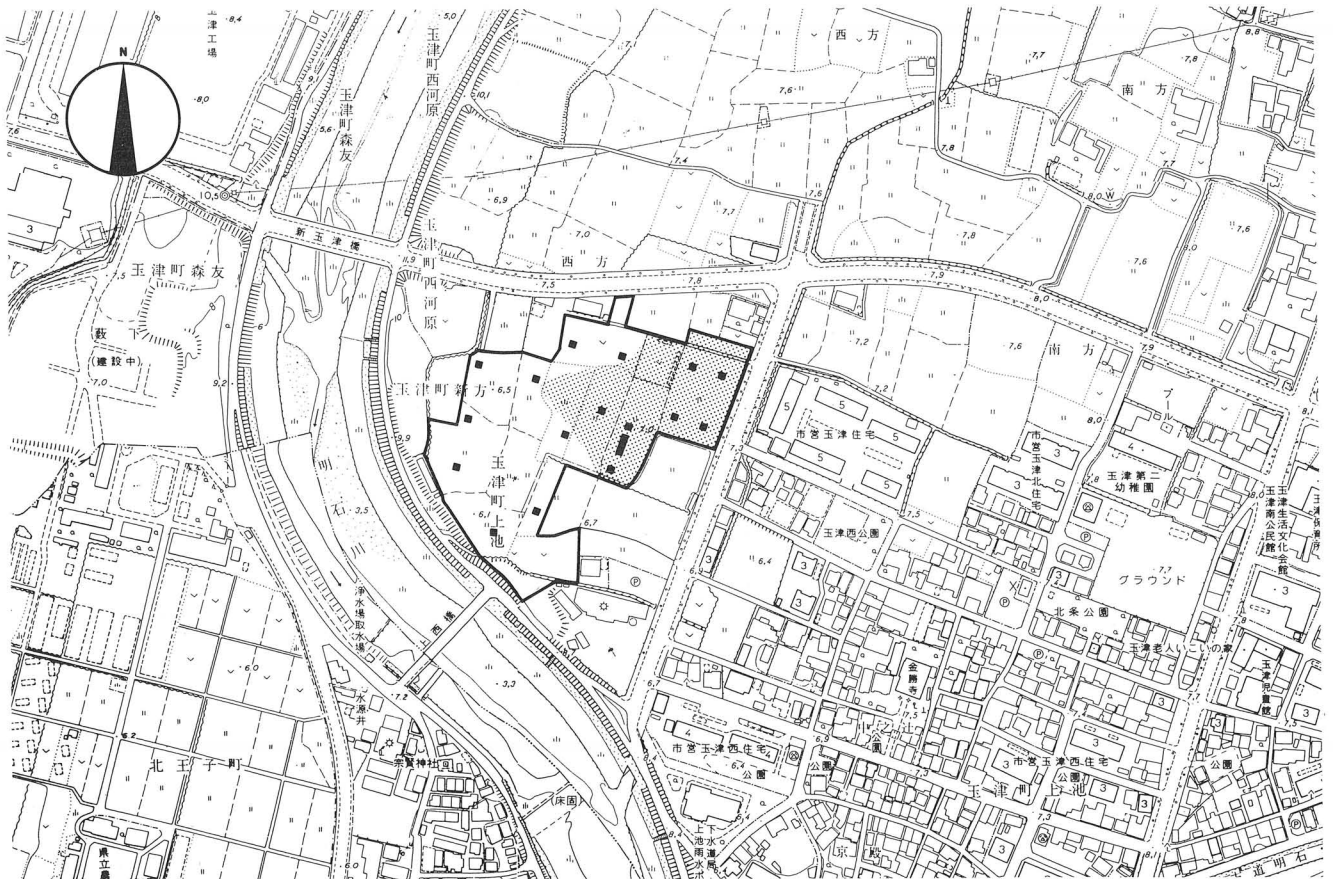


fig.241 上池地区試掘調査地点 (S = 1/5000)

## IV. 保存科学調査・作業の概要

平成5年度も、遺物と遺構についての保存科学による作業を継続的に実施している。遺構については、土層の転写や切り取りの方法により、遺構の一部ではあるが、遺構そのものの保存と活用を計っている。様々な材質の遺物についても、それらの材質や構造等の調査を行った上で、恒久的保存のための処置を実施している。これらの資料はすべて神戸市埋蔵文化財センターの収蔵庫及び特別収蔵庫で保管している。

### 1. 遺構に関する保存科学

**西求女塚古墳** 先年度に引き続き調査が実施され、大きな成果が得られている。その概要は本書や平成7年度刊行の概報に記されている通りである。調査の結果、地震による断層、地滑りで、墳丘が大きく改変されていることが判明し、次にその時期が問題となった。トレンチでの土層観察の結果、墳丘盛土の下位に耕土層と推定される層序が指摘され、古墳築造以前の水田の存在が予想された。この想定を検証するために、その土壌を中心に、3ヶ所のトレンチ断面から15点の土壌をサンプリングし、堆積物分析、花粉分析、プラントオパール分析、珪藻分析の土壌内の微化石及び鉱物の調査を行った。その結果、耕作土壌と指摘された層位は、水田であったことが確認され、かつこれまでの周辺の植生データと比べると、中世以降の植生を反映している可能性が高いことが判明した。この結果は、後に耕作土壌中から16世紀後半の備前焼が出土したことと一致した。これらを総合して、当古墳が大きく被害を受けたのはいわゆる「慶長の大地震」によるものであり、地震により墳丘の一部が、当時の水田の上面にすべりこんだため、このように部分的に見れば地層の逆転が生じたことが判明した。

この耕作土と盛土及びそれを突き破る墳砂の状態を記録するため、断面の土層転写を行った。また、最大で約2mの垂直方向のズレが生じた断面についても、土層の転写を行った。転写した土層はパネルに貼り、展示等で活用している。



fig.242 西求女塚古墳墳丘断面層断面土層転写パネル（地下に眠る神戸の歴史展X、平成7年度）

## 2. 遺物に関する保存科学

**本山北遺跡** 本山北遺跡第2次調査において検出された平安時代の木棺墓には、土器類の他に、特徴的な遺物が含まれていた。遺体の首飾りとみられるガラス玉12ヶ以上、金属鑄造に関係すると推定される取瓶、繊維加工に必要な鉄製紡錘車である。ガラス玉については奈良国立文化財研究所の肥塚隆保氏によるエネルギー分散型蛍光X線分析の結果、鉛系ガラスであることが判明している。ガラス玉は淡緑色の1点を除き、いずれも表面が腐食し、白色を呈している。この時期のガラス質遺物は、他の時期に比べて資料数が少なく、貴重な資料である。

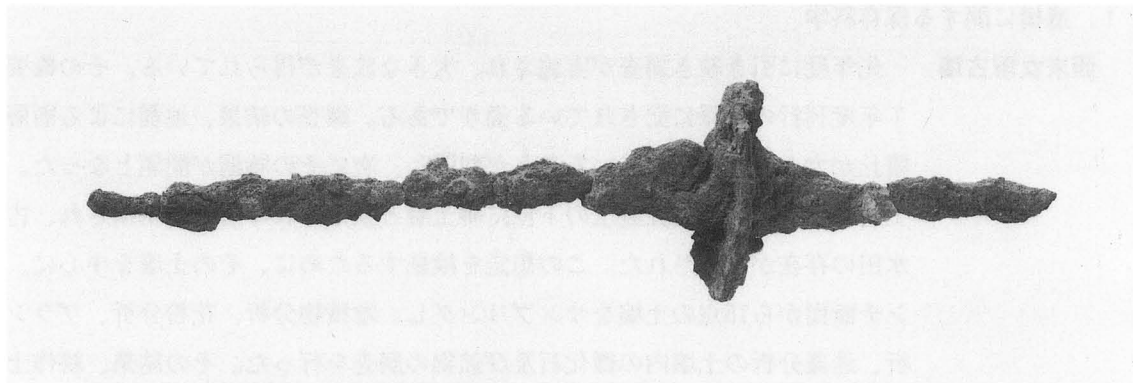


fig.243 本山北遺跡出土鉄製紡錘車の出土直後の状態

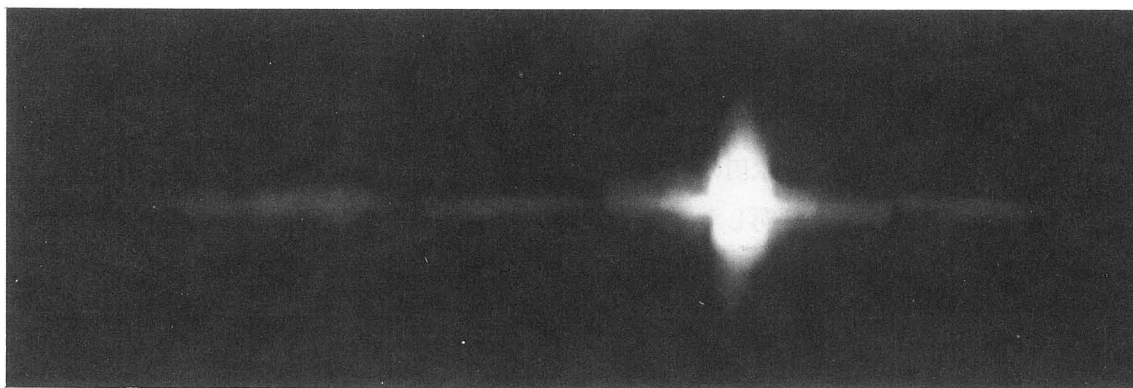


fig.244 本山北遺跡出土鉄製紡錘車のX線透過写真

**北青木遺跡** 北青木遺跡では、2点の青銅鏡と舌状青銅製品1点が出土している。いずれも弥生から奈良時代までの遺物が混在する層から出土しており、明確に時期を断じ得ない。奈良国立文化財研究所の協力により、蛍光X線分析を行った結果、青銅鏡の材質は、銅-スズ-鉛系で数種の微量元素を含む合金であることがわかっている。

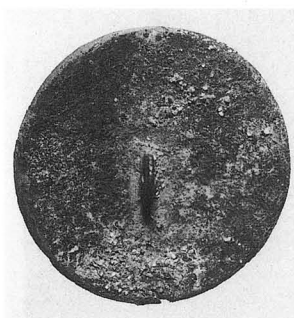


fig.245 北青木遺跡出土青銅鏡1 (鏡背、鏡面)

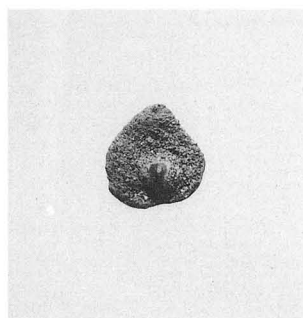


fig.246 北青木遺跡出土青銅鏡2 (鏡背、鏡面)



## 西求女塚古墳

西求女塚古墳の出土遺物は、地震という自然の力によって、埋葬時とは異なる状態で約400年間保たれていた。したがって、この2回の異なる埋蔵環境の痕跡が遺物に残されている可能性がある。この両者を見極めるためには、遺物の周囲に接する土壌から付着物を慎重にとりはずす必要があった。また、その付着物が繊維等の有機物である場合は、出土後急速にダメージを受け、崩壊する可能性がある。今回の調査では、青銅鏡や鉄製品の出土に際し、できるだけすみやかに現地での記録作業を終え、慎重に周囲の土をつけたまま取り上げを行った。その後、室内においてX線透過写真撮影や、出土直後の写真撮影を行い、実体顕微鏡下で付着物やサビの観察を行った。その結果、現地で確認された以外の織物等を検出することができた。検出した織物や取りはずせない織物の付着した青銅鏡は、冷暗所で少量のアルコール水溶液を入れた容器の内に窒素ガスを送り込み、仮保管を行った。青銅鏡については、付着していた土砂のクリーニングを終えたものから順次、奈良国立文化財研究所の御協力により蛍光X線分析により非破壊分析による調査を行っている。

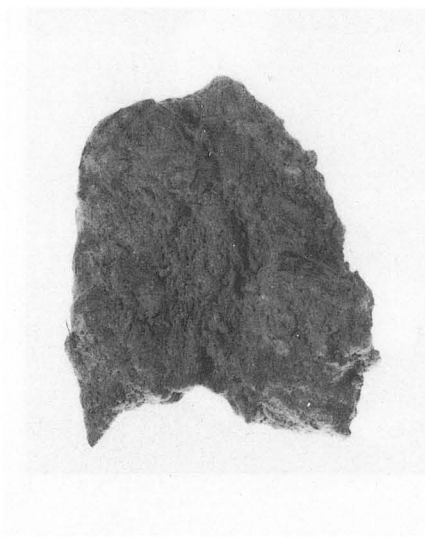


fig.247 西求女塚古墳出土鉄鏡処理前

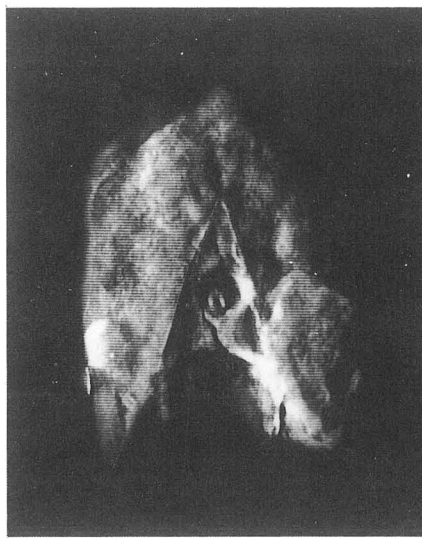


fig.248 同左X線透過写真画像強調画像

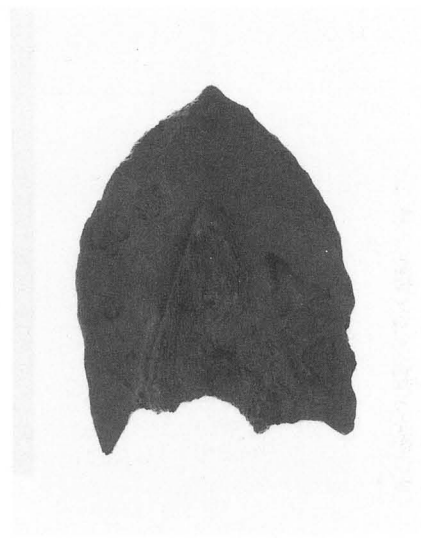


fig.249 同左処理後



fig.250 繊維付着青銅鏡の窒素ガス封入作業



fig.251 鉄製品付着土砂を慎重にアルコールを使って取り除く

**舞子浜遺跡** 本年度の舞子浜遺跡の調査において円筒棺が発見され、その中に人骨の遺存するものがあった。京都大学の片山教授の現地観察の後に人骨の取り上げを行った。5次調査及び7次調査で頭骨が遺存していたものについては、湾曲させた樹脂板で頭骨をすくい上げ、発泡ウレタンを周囲に充填し、固定を行った。8次調査の1号棺は、ほぼ全体の骨格が遺存していた。取り上げ後、室内にてアルコール水溶液による洗浄を行った。付着していた土砂を実体顕微鏡で観察したところ、白色の糸状繊維とおぼしきものと、直径1～2ミリの黒色の球状の物体が確認できた。繊維状のものは、人骨にも一部密着している。これが繊維であるとすれば、遺体を包んでいた布の崩壊しつつある姿と考えられる。黒色の球状を呈するものは、京都大学の片山教授のご教示によれば、小動物の糞とのことである。これが、いつ棺内に持ち込まれたのかは不明である。

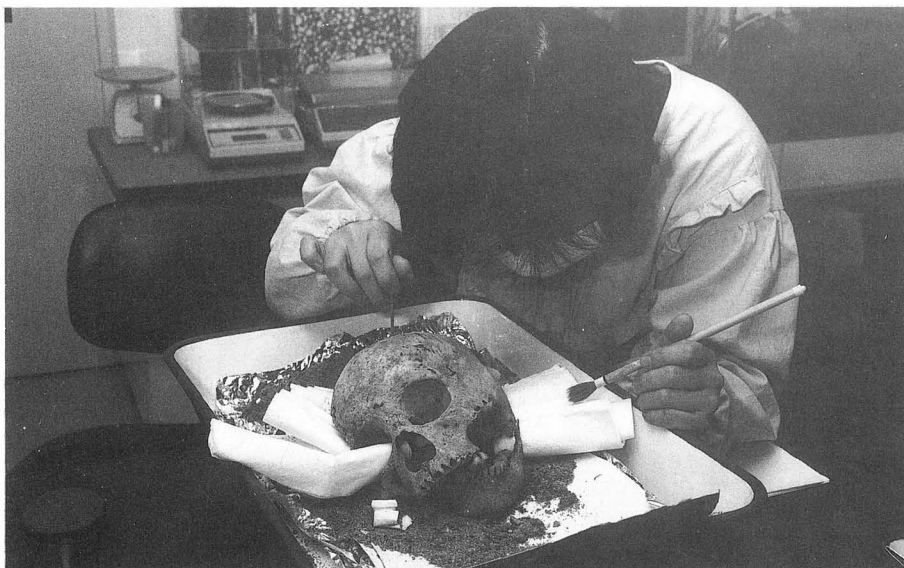


fig.252 舞子浜遺跡出土人骨のクリーニング作業

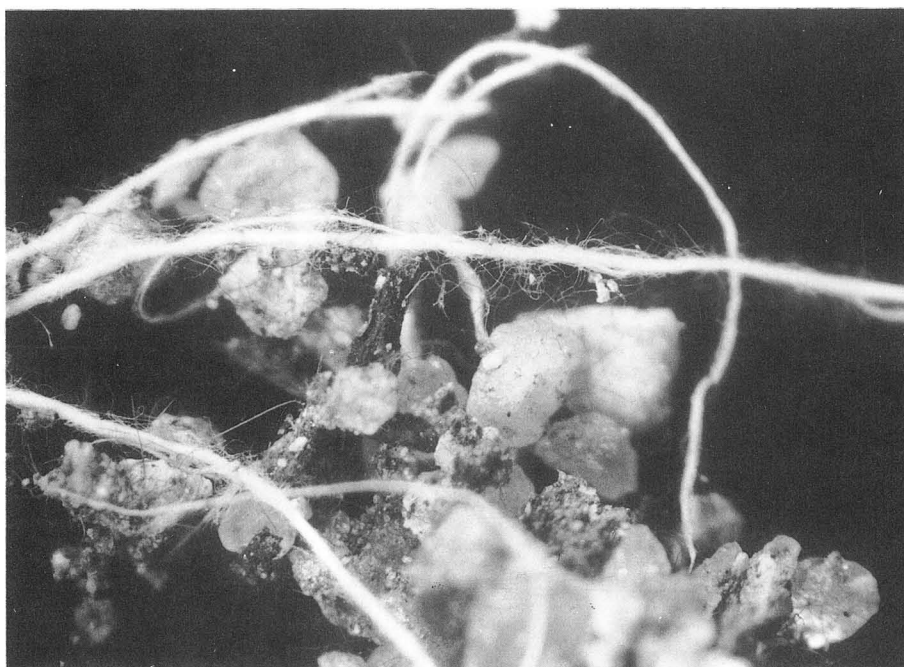


fig.253 舞子浜遺跡出土人骨に付着していた繊維(?)の実体顕微鏡写真

# 平成 5 年度 神戸市埋蔵文化財年報

頒価 1,800 円

---

平成 8 年 3 月 印刷

平成 8 年 3 月 発行

発 行

神戸市教育委員会文化財課

神戸市中央区加納町 6 丁目 5 番 1 号

☎ 078 (322) 5798

印 刷

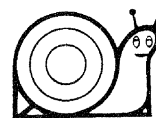
(有) アロエ印刷

神戸市中央区中町通 2 丁目 3 番 8 号

☎ 078 (371) 3831

---

広報印刷物登録・平成 7 年度 第 224 号 A-6 類



本書は、再生紙を使用しています。